

## 民数記を学ぶ (2)

塩野和夫

### 第3章 導き手 民数記9章15節～10章36節

#### 1 シナイ出発

##### (1) テキストの位置

エジプトを脱出して3か月後にイスラエルは当面の目的地であるシナイに到着した。それから約1か月後にシナイから40年に及ぶ荒野の旅に出かける。シナイを出発する様子を伝えているのが民数記9章15節～10章36節である。

テキストを学ぶにあたって2つのつながりから位置付けを確認しておく。第1は連続性である。シナイ出発を描く民数記9章15節～10章36節は出来事としてはどこから連なっているのか。それは出エジプト記40章34～38節からである。出エジプト記のこの箇所は完成した幕屋に雲が満ちるとイスラエルはその地に留まり、雲が幕屋を離れると出発したと記している。雲を合図にした旅で、イスラエルのシナイ出発を具体的に描いているのが民数記9章15節～10章36節である。したがって、出来事として民数記9章15節～10章36節は出エジプト記40章から連続している。

それでは出エジプト記と民数記9章15節の間にあるレビ記や民数記1章～9章14節は何であったのか。それらはイスラエルがシナイに滞在した日々様子を伝えている。ただし、その描写は漠然としたものではない。そこでは神の共同体として整えられていく様子、民数記では特に荒野を旅していくために整えられていく様子を記している。つまり、シナイ滞在の日々は荒野を旅するために必要な準備の時であった。

したがって、シナイ出発は出来事としては出エジプト記から続き、内容としてはレビ記及び民数記1章～9章14節と関わりがある。

## (2) シナイにおける課題

シナイ出発という視点から、シナイに滞在した日々における課題を学んでおきたい。

イスラエルのシナイ出発、それは40年に及ぶ荒野を旅した信仰共同体の旅立ちであった。その姿にこの世を旅している教会のモデルを見ることが出来る。イスラエルは何よりも共同体であった。「私」ではなく、「我ら」であった。共同体として整えられ、行動しなければならなかった。その要にはエジプトから導き出された神がいる。彼らは神に対する信仰共同体であり、幕屋も祭司制度も犠牲の規定も信仰共同体として整えられるためであった。

様々な制度によって整えられ、イスラエルは荒野へと旅立っていく。教会も同様である。キリストの教会として歩いていくためには、この世でキリストを証し、時にこの世と戦い、この世においてキリストの共同体として歩いていかなければならない。

## (3) シナイ出発の意味

荒野を旅していく体制が整うとイスラエルはシナイを旅立つ。シナイ出発にはどのような意味があるのか。

卒業は終わりという以上に新たな旅立ちという意味がある。卒業式において私たちは卒業証書を手にする。証書は学校における学びの一切を収穫したしるしである。学校における一切を学び終えると、新しい旅立ちが始まる。これが卒業式の意味である。イスラエルはシナイ滞在1か月の後に出発した。それは卒業式にも似ている。彼らは神の民として学ぶべき事柄を学び終えて出発した。エジプトを立出た時にはばらばらであった民が神の共同体として整えられてシナイを出発する。

だから、シナイ出発は何よりもイスラエルが神の民として整えられていた現実を語っている。

## 2 主の命令と案内人

### (1) 主の命によって一雲と火のしるしー 9章15～23節

イスラエルのシナイ出発を記しているテキストから学ぶ。

ここで言われていることは2つある。1つは雲が幕屋を覆っている時、イスラエルはその地に留まった。けれども、幕屋から雲が昇るとイスラエルは進んでいった。雲は神の臨在のしるしであった。雲が幕屋を覆ったというのは神がその所に留まってお

られるしるしである。雲が幕屋を昇ったのは神が幕屋を離れ先立って行かれるしるしであった。雲は神の意向を語っていた。そこで、雲によって神の意志を聞きながら、「イスラエルの人々は主の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した」(10章18節 a)。

大切なことは道具であった「雲」ではなく、「主の命令」である。イスラエルは主の命令に従って荒野を旅した。荒野の旅の本質は主の導きにある。

## (2) ラッパの合図 10章1～10節

次いでラッパの合図である。

ラッパの合図は3種類、記されている。会衆の召集にはラッパが2度吹かれた。部族の長の召集には1度である。出発の合図には短く、鋭く、断続して吹かれた。これは警報である。カナンに定着した後の戦いの合図も同じ警報であった。さらに、犠牲を捧げる喜びの日にもラッパが吹かれた。人々はラッパを聞くと「主に覚えられている」と思った。召集にしても、出発にしても、戦いにしても、犠牲の日にしても、ラッパの音は主の守りのしるしであった。

しかし、ラッパを吹いていたのは人間である。雲が幕屋を覆い、幕屋を離れたのは神の働きであった。それに対して、ラッパは人によって吹かれ、人の吹くラッパの音に人々は神の守りを思った。

## (3) 共同体の出発 10章11～28節

雲のしるしとラッパの合図を語った後に、シナイを出発した様子を伝えている。イスラエルはエジプトを出立した翌年の2月20日にシナイを出発した。それは共同体として整えられた旅立ちであった。

まず、東に宿営していたユダ・イッサカル・ゼブルンの部族が先頭に立つ。それから、幕屋が取り外されて運ばれる。次に南に宿営していたルベン・シメオン・ガドの部族が続き、さらに幕屋の聖なる物が運ばれる。その後に西に宿営していたエフライム・ベニヤミン・マナセの部族が旅立つ。最後に北に宿営していたダン・アセル・ナフタリの部族である。

こうして、イスラエルは共同体として秩序正しくシナイを出立した。

#### (4) 案内人 ホバブ 10章29～32節

旅の出発に関するもう一つの課題が語られている。荒野の旅の道案内人についてである。10章29節に案内人として「義兄に当たるミディアン人レウエルの子ホバブ」の名前が出ている。モーセはホバブに荒野の旅の道案内を頼んでいる。

ところで、ホバブとは誰かという問題がある。出エジプト記2章18節によるとミディアン人の祭司の娘たちの父がレウエルであり、出エジプト記3章1節によるとエトロはモーセのしゅうとである。さらに民数記10章29節によるとホバブはレウエルの子である。そこで、テキストに混乱があることを認めたくえて、ホバブとはエトロの別名であるとする解釈がある。

もう一つの課題はホバブが依頼を引き受けたのかどうかである。「引き受けなかった」とする学者がいる。それは「主の契約の箱は……彼らの先頭に進み、彼らの休む場所を探した」（10章33節）からである。それに対して「引き受けた」という考えもある。カナンに定着した後にホバブの子孫がカナンにいたからである。彼はおそらく2度目の申し出に対して引き受けた。

ところで、人の案内人と神の導きはどうか関係しているのか。テキストは両者の関係をめぐって混乱している。いずれにしても旅の案内人としてホバブが登場する。彼はミディアン人であった。

#### (5) 先立つ主の契約の箱 10章33～36節

ホバブが旅の案内人として同行する。しかし、それだけでは終わっていない。ホバブに対して主の契約の箱が出てくるからである。

民数記10章33節にこのように記されている。

人々は主の山を旅立ち、三日の道のりを進んだ。主の契約の箱はこの三日の道のりを彼らの先頭に進み、彼らの休む場所を探した。

これだけではない。旅で出会う敵に対しても主の契約の箱が進むと、モーセは「主よ、立ち上がって下さい」と言い、留まると「主よ、帰ってきてください」と言った。荒野の旅路は主が導かれた旅であったと主の契約の箱は語っている。



案内人ホバブ

(6) 主の命と案内人

このように見てくると、イスラエルのシナイ出発後の導きには神と人の働きとの双方があって入り混じっていたことが分かる。整理しておきたい。

- A ① 主の命によって(9章15~23節) 神の合図
- B ② ラッパの合図(10章1~10節) 人の合図
- C ③ イスラエル共同体の出発(10章11~28節) 出発
- D ④ 案内人ホバブ(10章29~32節) 人の案内
- E ⑤ 先立つ主の契約の箱(10章33~36節) 神の案内

神と人の働きが入り交ざっているが、それらはA・B・C・D・Eという構造の下に置かれている。それらの頂点はCで、イスラエルのシナイ出発の出来事を記してい

る。Cを中心としてAとEは神の働きを、BとDは人の働きを描いている。要するにシナイ出発には神の働きと人の働きの双方が必要であった。

いずれにしても荒野の旅路には案内人が必要で、案内人に信頼を置くことができるから旅を続けることができた。共同体の旅であれば、案内人の重要性はなおさらである。それでは、案内人とは誰であったのか。それは神なのか、人なのか。人と神なのか。人と神だとすれば、両者はどのように関係しているのか。

### 3 導き手をめぐって

#### (1) 導き手

シナイ出発における信仰共同体にとって最後の課題に導き手がいた。まとめておきたい。

まず、導き手とは全面的な信頼を寄せられていた人である。旅の安全と安心は導き手の確かさによって与えられたからである。私たちにしても安心して信仰の旅路を歩めるのは信頼できる導き手を与えられているからに違いない。

しかし、導き手とは神なのか、人なのか。両者の関係はどのようになっているのか。

#### (2) 案内人の役割

まず、人の案内人についてである。

イスラエルが荒野の旅路を続けていくために事情に通じた案内人が必要であった。信仰共同体として整えられていても、現実には人の導き手が必要である。私たちの人生も同様である。私たちの人生にも導き手が必要である。導き手は人生における決め手ですらある。

だから、案内人を選び良い関係を保つことは、荒野の旅を続けるイスラエルにとって極めて重要な事柄であった。

#### (3) 主の導き

しかし、人の導きがすべてではない。人の導きと神の導きが並列されているが、両者には重層的な構造がある。すなわち、神の導きの中に人の導きも含まれる。

だから、人が吹くラッパの合図に人々は神の守りを感じていた。荒野を実際に導いたのは人の案内人であった。けれども、それらを含めて聖書は「主の契約の箱が導い

た」と言っている。これは信仰の告白である。荒野の旅路は主の導きによるという信仰の告白である。

このように神の導きに信頼を寄せ、良き案内人を与えられて、イスラエルはシナイを出発した。教会も案内人を与えられ、信仰の旅路を続ける。それら一切は神の恵みの内にある。

#### 4 覚えましょう

(5) 彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。 民数記9章

シナイを出立したイスラエルは主の導きによって荒野を旅した。「主の命令によって」という信仰が荒野の旅路の基本的な特質を物語っている。キリスト者の信仰生活も同様で、主の導きにあると信じることに安心がある。

(6) あなたは、荒れ野のどこに天幕を張ればよいか、よくご存知です。わたしたちの目となって下さい。 民数記10章

現実の旅路には荒れ野の事情をよく知った案内人が必要であった。私たちの人生においても案内人が重要な役割を果たしている。

### 第4章 貪欲とその克服 民数記11章

#### 1 第2部「共同体の歩み」(民数記11章～20章13節)における課題

(1) 第2部「共同体の歩み」の構成

民数記のテーマは「共同体」である。荒野を旅するためにイスラエルは共同体として整えられねばならなかった。そこで民数記の第1部(1～10章)では人口調査を行い、各部族の配置を決め、カナンに向けて整然と出発した。

しかし、共同体が抱える問題は歩みの中で現れてくる。「生きる」とは「歩む」ことである。与えられた目標を目指し、課題に取り組みつつ歩む。歩みを続ける中で不一致や弱さ、欠点が次々と現れてくる。

民数記第2部はシナイ出発からカナン到着までの旅路を舞台としているが、主とし

て描き出しているのは旅路で発生した問題である。まず、構成を見ておきたい。

① 荒野における民の不満 11章1～34節

民は理由もなく不満を訴え泣いた。そのような民に神はどのように応えられたのか。第2部はまず民の不満を扱っている。

② ミリアムとアロンの反抗 11章35節～12章

モーセの姉ミリアムと兄アロンのモーセに対する反抗を記している。

③ カナン偵察と民の不平 13～14章

約束の地カナンを偵察したが、イスラエルの民は怖気付いてしまう。その時、民は主への信頼を失っていた。

④ 祭儀の規定 15章

祭儀の規定が入っている。

⑤ コラ・ダタン・アビラムの反逆 16章

モーセに対する反逆と結果を記している。

⑥ アロンの杖 17章1～26節

民のつぶやきを収めるため神のしるしが示される。アロンの杖から芽が吹き、つばみを出し、花が開いた。

⑦ 祭司とレビ人の義務と権利 17章27節～18章

祭司とレビ人の義務と権利が記されている。

⑧ 清めの水 19章

清めに関する規定が記されている。

⑨ メリバの水 20章1～13節

水がなく乾いた民はモーセに迫る。神は杖をとり、岩に命じて水を出すようにと言われた。それに対してモーセは岩を打って水を出した。命令通りに行わなかったことが、モーセの罪となる。

(2) 3つの課題

第2部「共同体の歩み」(11章～20章13節)は40年に及ぶ荒野の旅路で発生した深刻な問題を描き出していた。それらは様々な時に生じたが、およそ3つのタイプに分類できる。



第1はつぶやきである。「①荒野における民の不满」,「⑨メリバの水」がそれである。民は時に理由もなくつぶやき,時に渴いてつぶやいた。つぶやきは感染する。一人がつぶやくと他の者もつぶやいた。しかも,つぶやきにはモーセに対する不平不満があった。

第2は指導者モーセへの反抗で,「②ミリアムとアロンの反抗」,「⑤コラ・ダタン・アビラムの反逆」がある。反抗あるいは反逆したのはいずれも指導者で,その主張には根拠があるように思われた。彼らは「主はモーセを通してのみ語られるのだろうか」,「我々を通して語られるのではないだろうか」と主張した。しかし,そこには神によって立てられた指導者モーセに対する敬意がなく,モーセを支えようとする姿勢もなかった。

第3は「③カナン偵察と民の不平」でカナン偵察後の出来事である。カナンの地を偵察した後に多くの人々は怖気付き,イスラエルの全体が戸惑いと迷いの中に突き落とされた。その時のイスラエルには神に聞き信頼する神への信仰が欠けていた。神が命じ,導き,約束された地であるから,神がふさわしく与えて下さるはずである。しかし,おびえる中で神への信頼から外れて行った。

### (3) 課題とその克服

第2部「共同体の歩み」が描いていたのは,荒野の旅路における共同体の問題である。

あの時,彼らの弱さが顕わになっていた。それは情けなく頼りない姿である。だから,共同体の歩みから人間の弱さを知ることができる。ところで,荒野の旅路であらわにされたイスラエルの弱さは私たちの弱さでもある。だから,民数記第2部から私たち自身の問題を学ぶことができる。

それだけではない。民数記第2部はイスラエルの問題だけでなく,それらがどのように克服されたのかも記している。この点が重要である。「共同体の歩み」における問題をさらけ出すだけでなく,いかにして問題は克服されたのか。克服する力とは何であり,いかにしてその力に生かされるのかも描き出している。

荒野における40年の旅路は信仰の訓練を受けた時として想起されている。あの時,イスラエルは欠けのある姿をあらわにして訓練を受けた。だからこそ,後々の人々に信仰の訓練とは何なのかを教える旅路となった。

## 2 荒野における民の不満 民数記第11章 1～34節

民数記11章1～34節は第2部「共同体の歩み」の初めに置かれていて、不満を言い、泣く民を描いている。このような記述には40年に及ぶ荒野の旅への予兆がある。

### (1) 不満ととりなし 1～3節

小さなまとまりを持った出来事を1～3節は記している。荒野の旅を始めて間もなくのこと、「民は主の耳に達するほど、激しく不満を言った」(1節a)。

災難など起こっていない。エジプトから解放され主にある民として人々は、「共同体の歩み」を始めていた。その時になぜか、民は「不満を言った」。しかも、「主の耳に達するほど、激しく不満を言った」。およそ不平不満とはそうしたものである。理由も根拠もない。何もないのにあたかも大変なことが起こっているかのようにつぶやいた。すると、このつぶやきは共同体全体に広がっていく。

主は民の不満を怒り、主の火によって宿営の一部を焼かれた。ある学者はこの「火」を「雷が落ちたこと」ではないかと考えている。いずれにしても、不平を焼き尽くそうとする神の怒りが「火」に表現されている。

怒りを鎮めたのはモーセのとりなしの祈りであった。

### (2) 泣きごと 4～6節

4節に入る。4節から6節まではまとまりを持った物語となっている。

事の起ころは不満から生じた食事に対する不平であった。民は泣いて「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない」と不平を言った。不平から出た彼らの要求を聞くべきだろうか。一つだけ確かなことは神が与えて下さったマナに対する感謝がないことである。

神は人々の不満から出た要求を直ちに避けたり否定はされずに応えておられる。

### (3) マナ 7～9節

7～9節にマナの説明が入っている。

ここにおける説明はマナが優れた食事で、民の不满には根拠がないことを示している。だから、民は不平不満にとられるのではなく、神から与えられるマナによって霊肉共に養われるべきだった。

さて、マナは「コエンドロの種のように」とある。コエンドロの種は直径が3ミリほどの小さな卵型をしている。色は「琥珀の類のよう」とあるから黄色であった。シナイでは今もマナと呼ばれる食物がある。ここでは「夜、…マナも降った」と記している。

### (4) モーセの抗議 10～15節

神ではなく、モーセに向けられた「誰か肉を食べさせてくれないのか」という民の要求を彼は不快に思った。そこで、モーセは「わたしがこの民すべてをはらみ、わたしが彼らを生んだのでしょうか。…この民すべてに食べさせる肉をどこで見つければよいのでしょうか」（12～13節）と抗議している。

この箇所には旧約聖書で珍しい表現がある。抗議する際にモーセは「神はイスラエルに対して母のような存在である」と前提している。だから、神は養い、導かれる。しかし、「わたしはそうではない」とモーセは抗議している。そうではないにもかかわらず、なぜ多くの民の世話をしなければならないのか。それはあまりにも大きな重荷であり、それならば「どうかむしろ、殺してください」とモーセは訴える。

モーセの言葉は極めて人間的な表現をとっている。

### (5) 神の答え 1 16～23節

主はモーセの抗議を聞かれる。モーセの抗議は不快な思いからの投げやりな言葉であったが、主はそれを聞かれた。

神の答えの第1は重荷を分け合う者を70人与えることだった。今は民の不满がモーセ一人に集中している。だから、民の不平が泣きごとになる事態に一人では耐えられない。そこで、モーセに与えたものと同じ霊を70人に与え、モーセを支えさせる。これが第1の答えであった。

併せて、民に肉を与えるからその前の日に「自分自身を聖別しなさい」と命じられ

る。食事は信仰とは関係がないように思われる。しかし、とりわけ今回の肉に関しては与えられる前にまず身を清めなさい、そうして後に預かりなさいと言われる。それは肉が主の恵みとして感謝して受け取るべき性格を帯びていたことを示している。

#### (6) 霊の分与 24-30節

約束通り幕屋の周囲に立っていた人々に霊が与えられる。それは神がモーセに注がれていたのと同じ霊であった。

創造の初めに象徴的に語られていたように、それによって人間が生き、それによって人間が神の器とされる。それが霊である。

ところが、一つの問題が起こる。みんなが幕屋の周辺で霊を預かったのに、幕屋には行かずに宿営の外で霊を受けた者が二人いた。ヨシユアはそれを聞き、いけないと思った。しかし、モーセは違った。彼は神の言葉が語られることについては誰がどこで語ろうと良いことだと判断した。

#### (7) 貪欲の墓 31-34節

神のもう一つの答えが記されている。

約束通りに神は肉を与えられた。うずらが飛んできて宿営の周辺に落ちる。民は難なくうずらを集め、乾かし、毎日食べた。

その時、神は怒りを発せられた。そのため、民の内に激しい疫病が起こる。亡くなった人の墓には「キプロト・ハタアウ（貪欲の墓）」と記された。人々は亡くなった人に神の怒りを思った。初めの貪欲に対してはこれを良しとして神は答えられた。その際に「自分自身を聖別」し、神に対してふさわしく食べるようにと指示があった。それにもかかわらず、なお貪欲にとらわれていた人々に対して神は怒りを発せられた。



キプロト・ハタアウ (貪欲の罪)

### 3 貪欲の罪とその克服

#### (1) 貪欲の罪

「おいしいものが食べたい」というのは、人間の自然な要求である。しかし、日常的なこの要求に対して節度を持つことが求められている。節度を越えて求める時、何かが狂ってしまう。

民数記11章が描く貪欲の罪には理由がない。しいて言えば、自然な欲求がなぜかコントロールを失った。セルフコントロールはまず自分との関わりに求められる。自分らしくふさわしく生きるためである。次いで、人々との関わりにおいて求められ、神との関係においても重要な事柄となっている。ところが、要求がコントロールを失わ

せると、それが貪欲の罪となる。

貪欲は何故か、民の間に広がって行った。多くの人々もコントロールを失って要求の虜となった。そこで、民は罪へと陥って行った。貪欲から生じた罪である。

罪とは神との関わりからの外的を外すことである。貪欲な思いに囚われた時に人々は神とのあるべき関わりから外れ、罪の状態へと落ち込んでいった。

## (2) 正当な抗議

民が貪欲によって神から離れて行ったのに対して、正当と認められた抗議も記されている。モーセが神に訴えた抗議である。

民の要求に対して不快な思いを持ったモーセは神に対して抗議した。ところが、この行為は罪とはされずに正当な抗議として受けとめられた。なぜか。モーセの心にも不平不満が満ちていた。その状態は民と同様である。しかし、貪欲によって民が神から離れて行ったのに対して、モーセは神に向かった。ここに決定的な違いがある。

モーセが不平不満のあるがままを神に向けて訴えた時に、神はモーセの求めを受け入れられた。神はあるがままの訴えを受け入れて下さる。だから、大切なことはどのような時にも神からの外的を外さないことである。

## (3) 神の応答

「おいしいものを食べたい」という民の欲求に神は答えられる。人間の自然な求めを尊重し、人を生かす神がここに描かれている。

ただし神は「自分自身を聖別しなさい」と霊的に応えられた。食べることは端的な日常生活である。しかし、神との関わりを生きる者にとってこの日常生活も神の恵みの内におかれている。だから、感謝していただくことがふさわしい。

イエスは主の祈りにおいて「私たちに必要な糧を今日も与えて下さい」(マタイ6章11節)と教えておられる。信仰者にとって食べることも霊的な事柄なのである。

## (4) 神の裁き

ところが、貪欲の虜となった民は神の大切な指示を忘れてしまう。

赤裸々な人間の姿がここに描かれている。うずらは神から与えられた賜物であった。ところが、うずらを集め、干し、日ごとに食べるうちに、肉への貪欲が民の心を支配

していった。貪欲は神への感謝から民の心を引き離した。貪欲に囚われた民に神の裁きが下される。「主は民に対して憤りを発し、激しい疫病で民を打たれた。そのためその場所は、キブロット・ハタアワ（貪欲の墓）と呼ばれている」。

神の裁きは貪欲の恐ろしさを伝える物語となっている。

#### 4 覚えましょう

(7) 民は主の耳に達するほど、激しく不満を言った。 民数記11章

ありもしないことを現実であるかのように思いこませる。不平の力がここに働いている。だから、民は激しく不満を言った。不平不満に囚われた者のすぐそこに罪は近づいている。

(8) あなたに授けてある霊の一部を取って、彼らに授ける。 民数記11章

モーセに与えられていた霊の一部を神は70人の長老に与えられた。彼らがモーセの重荷を共に担うためである。神の出来事を担うために、私たちも霊的に整えられる。